

令和7年3月12日

目黒区教育委員会教育長 宛て

目黒区立田道小学校

校長 塚本 哲

令和6年度 目黒区立田道小学校 学校評価報告書

1 学校評価委員会の実施内容

- (1) 第1回実施日時 令和6年6月22日(土) 午前9時00分～午前10時00分
- ・学校公開授業参観について
 - ・学校経営方針、主な学校行事について
- (2) 第2回実施日時 令和6年12月7日(土) 午前9時00分～午前9時30分
- ・学習発表会【第1回】について
 - ・これまでの学校の様子について
- (3) 第3回実施日時 令和7年2月15日(土) 午前8時45分～午前9時20分
- ・四者による学校評価のためのアンケート結果について
 - ・学習発表会【第2回】について
 - ・次年度に向けて

2 参加者 学校評議員5名、校長、副校長

3 評価の結果等 ※四者…児童、保護者、地域の方、教職員のこと

評価項目	◎(成果)、●(課題)、 ⦿(成果と課題の両者を含む)	次年度の教育活動の改善点	学校評価委員会での意見
I 学校全体について ・学校の雰囲気、学習環境、教職員の態度などについて、家庭・地域との連携、地域人材の活用などについて	◎特に学校の雰囲気について保護者・地域の肯定的評価は90%以上に達し、特に保護者の評価は前年度より上昇していることから、学校全体に対する評価は良好である。これは約9割の児童が学校は楽しいと回答していることと関連しており、児童が楽しく学校に通う姿が保護者・地域に確実に伝わっていることの成果である捉えている。	・次年度は本校の特色ある取組として、「12の取組」を教育課程に確実に位置付け、学校と保護者・地域が情報共有と連携を図りながら、それぞれの教育力を十分発揮する中で、児童の資質・能力の育成を図っていく。	・児童一人ひとりの能力を最大化する教育が重要である。 ・今後も家庭・地域との連携を図りながら、教職員と児童、児童同士の直接的な関わり合いや、多様な体験活動等を通して学校教育の役割を果たすことを期待している。

評価項目	◎（成果）、●（課題）、 ◎（成果と課題の両者を含む）	次年度の教育活動の改善点	学校評価委員会での意見
Ⅱ 教育目標について ・教育目標、時程、教育内容全体について	◎保護者・地域の肯定的評価は８０％以上に達し、両者の評価は前年度より上昇していることから、教育内容全体に係る評価は概ね良好である。日頃から保護者・地域に対し、適時適切に学校の取組等について情報発信しているため、これまで以上に保護者・地域の理解を得ることができたものと捉えている。 本校では「自分の生き方を考える子どもの育成」を目指していることから、特色ある教育活動のさらなる充実が課題である。	・次年度はこれまでの取組の発展として、児童が自己の興味・関心に基づき活動内容を設定し、探究する時間として「田Ｑタイム」を年間２０単位時間位置付け、生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を舵取りする力を身に付ける。	・児童が社会で活躍する２０４０年代を見据えた質の高い、深い学びを実現することにより資質・能力の育成に努めてほしい。 ・引き続き、本校の創意工夫を最大限引き出し、児童一人ひとりの意欲を高め、可能性を開花させる柔軟な教育課程の編成・実施を期待している。
Ⅲ 心の教育について ・道徳科の授業の充実や児童・生徒の道徳的実践力の向上に向けた取組について	◎児童・保護者・教職員の肯定的評価は９０％以上に達し、特に保護者は前年度より１８ポイント上昇していることから、心の教育に係る評価は良好である。これは校長講話（毎週）や学校生活アンケート（毎月）、「みんなの時間」（縦割り班活動・児童集会等）（毎週）といった取組の成果であると捉えている。	・次年度は、道徳授業地区公開講座において外部講師を招聘し、児童、教職員、保護者、地域が「生きる権利」「育つ権利」「守られる権利」「参加する権利」といった子どもの権利に触れながら、自殺、不登校、いじめ等の未然防止に向けて考え、意見交換を行う機会を設定する。	・今後も道徳科の授業のみならず、教育活動全体を通して豊かな心の育成に努めてほしい。特に、本校で大切にしている異学年交流や学校行事を通して、児童一人ひとりが思いやりの心をはぐくんでほしい。

評価項目	◎（成果）、●（課題）、 ◎（成果と課題の両者を含む）	次年度の教育活動の改善点	学校評価委員会での意見
Ⅳ 学習指導等について ・学力の定着・向上に向けた授業の改善・充実、少人数指導、〇〇タイム、主体的に学習に取り組む態度等の取組について ・職場体験等体験活動、自然宿泊体験教室、キャリア教育等の充実について	● 児童・教職員の肯定的な評価は約90%を維持している。一方で保護者は、前年度より約11ポイント上昇したものの90%には達していないことから、引き続き、授業改善に努め、全児童に対し基礎的・基本的な知識・技能の定着を確実に図る必要があると捉えている。	・単元デザインや40分授業デザインの中で「Dendo 学ぶ10の姿（学習行動）」を引き出す場面を意図的・継続的に取り入れ、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る。 ・児童が自立した学習者になれるよう、学習課題、学習過程、学習形態において自己選択・自己調整する場面を取り入れた授業デザインを工夫する。	・児童が、直面したことのない課題に対しても解決することができるよう、知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力の育成を図る上でその質を高めていくことが重要である。 ・引き続き、校内研究等で得た学びを土台に、さらなる授業改善に努めてほしい。
Ⅴ 体育・健康教育について ・体力向上、健康の促進に向けた取組について	● 高学年児童の肯定的な評価は、低学年児童の割合より約10ポイント下降していることから、今後は体力向上、健康の促進に向けた取組を工夫する必要があると捉えている。	・これまで実施してきた「体力アップタイム」や学校健康トレーナーによる取組内容を、次年度は発達段階や技能習得状況別に応じた取組となるよう工夫し、児童が自己の実態に応じて選択して取り組めるようにする。	・体力は、身体面や精神面の充実に深い関わりがあり、児童の人生を支える上で重要な役割を担っている。 ・令和7年度はこれまで取り組んできた体力向上及び健康の促進に係る取組をより計画的に実施することを期待している。
Ⅵ 特別活動について ・学校行事の充実、異学年交流活動、クラブ・部活動の充実などについて	◎ 児童の肯定的評価は90%以上を維持し、さらに教職員の評価は前年度より約21ポイント上昇したことから特別活動の評価は概ね良好である。本校では「心ゆたかで思いやりのある子」を教育目標に定めていることから、特別活動のさらなる充実を図る必要がある。	・これまで行ってきた縦割り班活動に加え、次年度はペア学年活動を年間計画に位置付けて実施することで、同じ地域の異年齢の子どもたちが集う場所としての公立学校ならではのよさを生かし、人と関わる喜びや自信を獲得できる体験を積ませる。	・特別活動の充実は、予測困難なこれからの時代を生きる児童に必要な資質・能力の育成に資するものと捉えている。特に、本校で大切にしている異学年交流は児童の社会性が育つ重要な取組である。次年度以降も発展的に継続させることを期待している。

評価項目	◎（成果）、●（課題）、 ◎（成果と課題の両者を含む）	次年度の教育活動の改善点	学校評価委員会での意見
Ⅶ 学校生活全般について <生活指導> 生活規律の徹底、いじめや不登校の現状と対応、教員の関わり方、特別支援教育への取組などについて	◎ 肯定的評価について、児童は90%以上を維持し、保護者の割合も前年度より約20ポイント上昇したことから、生活指導に係る評価は概ね良好である。 さらに児童の健全な成長や自立を促すためには、児童が意見を述べたり、他者との対話や議論を通じて考えたりする機会を大切にしていける必要があると捉えている。	・学校のきまりの在り方について、次年度は、年度初めに教員対象研修を実施し、指導観の転換を図る。児童に対しては、学校のきまりに係る意見を表明する場としてアンケート調査を行い、見直すべき点については代表委員会を中心に協議を行い、改善を図る。	・全児童に対し、学校が安心して楽しく通える魅力的な場所となるよう、学校・保護者・地域が一丸となって取り組む必要がある。特に、不登校児童への支援については、引き続き、その児童がどのような状態にあり、どのような支援を要しているのかを見極め、適切な関わりや働きかけに努めてほしい。
<防災教育・安全指導> 事故や災害に関する安全教育や情報モラル教育の充実、安全管理などについて	◎ 肯定的評価について、児童・保護者は約95%、教職員は100%と高い評価を得た。現に避難訓練では児童一人ひとりが危機意識をもって取り組むことができおり、その姿と学校評価に乖離はない。また、昨年度との比較において肯定的評価が向上しており、セーフティ教室等を含む目黒警察署との連携の成果であると捉えている。	・日常生活の様々な場面で、生活安全・交通安全・災害安全の各領域の課題を児童に自分事として捉えさせ、発達段階を意識した指導及び、家庭・地域・関係機関等と連携した指導を実践的に行う。具体的には、月1回の避難訓練及び安全指導を児童にねらいを示しながら確実に実施するとともに、目黒警察署職員や企業と連携した取組を行う。	・児童が自ら進んで安全で安心な社会づくりに参加し貢献できるようになることが重要である。 ・今後も、教育活動全体を通して、自らの安全を確保することのできる基礎的な資質・能力を継続的に身に付けられるよう、安全に係る取組の推進を期待している。
<幼・保・小・中連携> - 中学校や同じ中学校区の小学校との連携について - 近隣の幼稚園・保育園との連携について	● 保護者の肯定的な評価は約21ポイント上昇したことから、連携に係る取組は一定程度伝わっているものと捉えている。 一方、他項目と比べ、肯定的評価が低い状況であるため、引き続き、異なる学校種の活動についての理解を深め、系統性のある指導を行う必要があると捉えている。	・特に、低学年では、前期前半の教育活動の中で、遊びを通して思考を巡らせ、想像力を発揮しながら、主体的に様々な対象と直接関わり、総合的に学んでいくといった幼児期の学びの特性を意識した視点を多く取り入れる。	・児童の社会性をはぐくむために、異年齢交流は重要である。 ・就学前から中学校までの10年間の発達段階を見据え、それぞれのねらいを踏まえた活動を計画的に実施することを期待している。

評価項目	◎（成果）、●（課題）、 ○（成果と課題の両者を含む）	次年度の教育活動の改善点	学校評価委員会での意見
VII 情報の発信 ・学校の情報発信の充実について	●肯定的評価の割合は保護者・地域・教職員ともに前年度より向上し、特に保護者については19ポイントも上昇したことから、改善が図られているものと捉えている。 引き続き、情報を受信する側の立場を考慮した発信時期及び方法を工夫する必要があると捉えている。	・学校の取組や児童の様子が確実に伝わるよう、次年度は今年度の取組に加えて、保護者連絡システムによるお便りの配信日の分散や、学校公開日における授業公開時間の拡大を実施する。	・積極的な魅力発信は非常に大切である。例えば情報発信の1つである学校ホームページが安定的に運営されていると、児童や保護者にとっては安心感につながるものである。 ・学校ホームページの閲覧数を把握しながら、学校の特色や魅力を的確に伝え、興味をひくデザインの工夫や更新に努めてほしい。
IX 教員の人材育成について ・日常の職務をとおして専門性と協働性の育成、教育公務員の自覚について	◎教職員の肯定的評価は100%であり、教員の人材育成に係る評価は良好である。 今後も、2040年代を見据えた新しい時代にふさわしい学校教育の実現が図られるよう、指導観の転換を図る必要があると捉えている。	・引き続き、「40分授業午前5時間制」で生み出した学校裁量の時間の一部を活用し、外部講師を招聘した研修や教職員同士で学び合う時間、教材研究等の教職員一人ひとりに裁量のある時間を十分確保していく。	・今後も学校管理職のリーダーシップの下、多様な専門性を有する質の高い教職員集団を形成し、組織の力で児童一人ひとりの学びを最大限に引き出してほしい。
X 教員の働き方改革について ・校務支援システムの活用、「チーム学校」を意識した業務分担等、組織的な業務の効率化・最適化について	◎教職員の肯定的評価は57ポイント上昇したことから教員の働き方改革に向けた改善は図られている。 引き続き、「働きやすさ」と「働きがい」の両立を図っていく必要があると捉えている。	・今年度に引き続き、教職員対象アンケート調査を実施し、意見を把握した上で業務改善を図る。また、再来年も見据えて、働き方改革の取組状況の「見える化」とPDCAサイクルを構築する。	・働き方改革の目的は、教職人生を豊かにすることで、自己の人間性や創造性を高め、効果的な教育活動を行うことである。 ・引き続き、働き方改革を推進し、児童の主体的な学びへの支援・伴走といった教員の役割を果たすことを期待している。
XI 服務事故の防止について ・服務事故防止に向けた取組などについて	◎教職員の肯定的評価は100%であるが、服務事故は絶対に起こしてはいけない事案であるとの認識の下、今後も定期的に服務事故防止に係る教職員の意識を締め直す必要がある。	・次年度も服務事故防止研修を全教職員が受講し、事例から事故が発生した要因を教職員に考えさせることで、服務事故ゼロの実現を図る。	・教職員は、児童の成長に大きな影響を与えることから、引き続き、その職責を十分に理解し、服務の厳正に努めてほしい。